

京都アトツギイノベーションプロジェクト MEET UP KYOTO ミートアップvol.2

主催:京都市、公益財団法人京都高度技術研究所 (ASTEM)

日時:2019年9月20日(金) 場所:公益財団法人京都高度技術研究所 (ASTEM)

時代が直面する緊急課題である「後継者不在」。京都市、公益財団法人京都高度技術研究所 (ASTEM) では、この課題に即応するために京都ベンチャー型事業継承支援事業「京都アトツギイノベーションプロジェクト」を推進しています。このプロジェクトの一環として展開するミートアップ(講演会・トークセッション・交流会)も数多くの方々に注目され、高い評価をいただいています。第2回目のアトツギイノベーター講演ではオイル業界に次代の新風を吹き込んだ福田喜之氏とウェアラブル市場を牽引する三寺歩氏を講師としてお招きしてその卓越した発想と独創の戦略をお聞きました。



アトツギイノベーター講演 ①

「オイル業界初の革新的なサービスを実現!! —オイル販売×IoT~3代目社長の経営革新—」

株式会社 FUKUDA
代表取締役 福田 喜之 氏

株式会社 FUKUDA は自動車やバイク向けのオイル(潤滑油、工業用油)の卸売を主な業務としている会社です。取引先は自動車整備工場やカーディーラーなどで、営業エリアは近畿2府4県、顧客数は約3,000店舗です。燃料商社に勤めていた父親の福田毅氏が1969年に独立して株式会社福田商店を創業しました。当時は東名高速の全線開通が象徴するように日本のモータリゼーション隆盛の時代であり、1975年にはスーパーダイエー(現イオングループ)がカーショップを全国に新展開したのを機に卸売に業態を絞り込みました。その後、1992年に父親が他界。母親の福田良子氏が代表取締役に就任しました。福田喜之氏は地元の京都日産自動車で営業職を経験した後、1998年、28歳の時に株式会社福田商店に戻り、2005年に代表取締役に、翌年に社名を株式会社 FUKUDA に変更します。「まず、社員の意識改革を試みたのですが、反発も強く4名の内の1名はライバル会社へ転職し、もう1名も実家の家業を継ぐために退社。現在も残っている往時の社員は来年70歳になる1名だけです。取引先は大手量販店で業績自体は堅調でしたが、売っているモノは競合他社と同一であり、必然的に価格競争に陥ります。先行きが見えない中で新たな舵切りが必要でした。熟考したのは『私たち



にしかできないものは何か』ということです。『必要とされる会社になる』ための模索が続きました」。その中で福田喜之氏が見出したのが「地域密着化」であり、「配送」、「回収」、「保管」、「処理」など自社業務に関わるキーワードでした。「事業の継承者として私には顧客・資金・社屋などの基盤となる財産がある」という気づきも、「第2の創業」への起点になったと福田喜之氏は振り返ります。

株式会社 FUKUDA が独自に確立したのは自動車運送事業許可、IBCローリーサービス、産業廃棄物処理収集運搬許可、危険物貯蔵所を背景に「配送」、「営業」、「廃棄物回収」、「保管」を一体化したワンストップサービス体制でした。



IBCローリーサービスとは顧客の店舗に専用タンクを無償で設置し、必要な量(販売量は1L単位)だけエンジンオイルを販売するサービスです。従来のドラム缶を用いた販売方法は顧客企業と自社双方にとって重労働であったものが、大幅に軽減され、安全性の向上にも寄与するものでした。また、専用タンクには残量検知システムを導入しており、残量管理やオイルの発注も極めてスムーズになりました。保管についても200Lドラム缶約2,500本を保有できる関西最大の危険物保管倉庫を有しています。これらは低価格を実現するものであり、CO2排出削減にも大きく貢献(エコマーク認定取得)するものです。さらに、次代に向けて全国一括の発注集約、AI分析による需要予測システムの導入などを目指しています。この試みは人材不足、配送機材不足の解消にも直結するものとして期待されています。

オイル業界初の革新的なサービスの実現は圧倒的な評価を得ており、昨年度の「第2回日本サービス大賞」(主催:サー

ビス産業生産性協議会)の「優秀賞」を受賞しています。これは様々な業種のあらゆるサービスを共通の尺度で評価し、優れたサービスを表彰する日本初の表彰制度です。また、経済産業省近畿経済産業局の「関西おもしろ企業事例集~企業訪問から見える新たな兆:KIZASHI~Vol.3社員も会社も輝く篇」にも年間1000件以上の企業訪問の中から「オイル業界初の革新的サービスにより働きやすい環境を創出!」として選ばれています。



アツギイノベーター講演 ②

「西陣織×IoTでウェアラブルコンピュータ市場に進出！ —廃業寸前からの劇的ドラマ—

ミツフジ株式会社
代表取締役社長 三寺 歩 氏

「祖父が西陣織の帯の製造工場を創業したのは1956年。その後、1965年にラッセルレースへ業態を転換し、1979年に三ツ富士繊維工業株式会社を設立しますが、時代が変遷する中で繊維業界は衰退の一途を辿っていました。」三寺歩氏は立命館大学経営学部を卒業後、松下電器産業株式会社(現パナソニック株式会社)を経てシスコシステムズ合同会社、SAPジャパン株式会社、ブルーコートシステムズ合同会社など家業とは全く異なる先端IT企業でキャリアを重ねていました。「2代目の父親とは学生時代から対立していました。いずれ会社は潰れるだろうと思っており、継ぐ意思はまったくありませんでした。しかし、2014年に廃業寸前だった家業の立て直しに挑むことになったのです。その時、社屋はプレハブの掘り立て小屋で従業員は数名という状況でした。」代表取締役社長に就任した三寺歩氏が最初に手がけたのが経営資源の徹底的な見直しでした。熟考



の末に見出したのは、当時、会社が行っていた様々な事業を全て中止し、父親が開発した銀メッキ繊維で一点突破に命運を賭けることでした。これがミツフジの飛躍の起点になった導電性繊維「AGposs(エージーポス)」です。

「AGposs」はそれまでの銀織り込み繊維やフィルム状の銀糸とは異なり、ナイロンの表面に銀メッキ加工を施しています。銀の特徴である電気伝導性や抗菌性に優れているだけでなく、独自の技術により伸縮性と洗濯耐久性も備えていることが特徴です。また、銀はあらゆる金属の中で生体に対して最も安全な金属であり、比重が非常に小さいのでコストパフォーマンスの面でも優れており、多様なニーズに即応して最適な商品を提案することができるのです。国際宇宙ステーションにおける宇宙飛行士の下着素材にも採用され、企業の研究開発部門からウェアラブルデバイスの素材としても脚光を浴びるようになります。



現在、ミツフジは主力事業として生体情報マネジメントソリューション「hamon(ハモン)」を展開しています。「AGposs」を電極センサーとして編み込み、着用するだけで生体情報を取得できるウェアラブルIoTシャツ、取得した情報を送信するトランスミッター、そして生体情報を独自のアルゴリズムで解析することで、健康と安心・安全をお届けするためのワンストップサービスです。「hamon」の生体情報は心拍の間隔「RRI」で測定しています。医療分野で自律神経の機能を計測する指標とされているものであり、リアルタイムで身体の状態を把握することができます。また24時間連続で取得できる生体情報から、まだ誰も知らない人間の動きを解明できる可能性があります。想定される活用領域は産業、生活、スポーツなどきわめて広範囲です。たとえば、働く人々の体調やストレスの管理、介護・福祉の現場での見守りや健康の保持、アスリートの筋肉疲労度の把握、緊張度の監視、トレーニングの効率化。さらに過労死や孤独死から遠隔医療や予防医療まで様々な社会的課題の解消にも貢献できると考えています。

ウェアラブル市場は非常に大きな可能性を秘めています。伝統に裏付けられた技術と最先端IoT技術の融合が創出したミツフジの最大の強みは「独自の技術で世界一綺麗な心電データを取得できる」ことです。また糸からクラウドまでを1社で提供できるだけでなく、各パート別のカスタマイズも自在です。いま、ミツフジは特に「hamon」の要となる「信頼できるアルゴリズム開発」を注視し、これに全力を注いでいます。昨年、新たな製造拠点として福島県川俣町に先進の自社工場を竣工。Forbes JAPANの価値ある企業を表彰する「スモールジャイアンツ」の大賞にも選出されました。

